

地で焼津と共に日本武尊叢雲を抽つて野火を拒きたる古跡地である、延喜式草薙神社がある。

○久能山 有度山とも稱し静岡の東、清水の南、海岸に沿ふて隆起せる一連岡で久能東照宮あり、不時の蔬菜栽培、莓の栽培地もあるが夫は久能莓と稱して有名である、山麓村松には鐵舟寺、龍華寺の二寺がある、龍華寺には高山樗牛氏の墳墓がある。

○清水築港 三保真崎より正北に畫せる一線を港界として總面積一〇〇〇萬平方米水深七米以上の面積四〇〇萬平方米で第一期工事費金四十六萬五千餘圓、第二期工事費

金八百四十四萬千餘圓陸上設備費金二百萬圓を以て静岡縣に於て施工した、巴川北方の岸壁には三千噸級の船舶五隻を繋留し得る、一ヶ年一、二四五、九〇五噸の輸入出貨物を吞吐するも故あるかなである。三二、一九噸價格七百三十八萬餘圓の綠茶は實に此清水港から輸出せらるゝ。

○清水市静岡市間國道改築 延長一一、〇九〇米、幅員二一米八路面舗装アスファルトコンクリート又は膠石舗装で工事費金貳百拾壹萬千餘圓を以て静岡縣に於て施工中等である。

## 田中好君を送る

佐藤利恭

内務省の名物男田中好君が永年の官吏生活を捨て、時雨

つゞきの九月中旬新興會社東京高遠鐵道に入つた、世は將

に秋である何だか云ひ知れぬ寂しさを感ずる、氏が内務省の名物男であつた、表面的の理由に就て私は田中君を解説する必要はない、苟も我邦土木界の總ての人の周知の事實であるから。

同君が兵庫縣から内務省に轉じた大正七年に私も亦滋賀縣から内務省に轉じ爾來十有六年間氏と私とは共に勉め共に笑ひ共に飲み共に食し共に旅する等恰も影の形に添ふ如く暮して來たものである。従つて私は最も好く田中君を知る者の一人として田中君を解剖して君を送る辭に代へたいと思ふ。

田中君が内務省を去ると傳へらるゝや異口同音に「後はドーなるだらうか」と云ふ聲を私は種々の方面の人々から聞かされた、日頃同君から知遇を受けた人々の口からも聞いた、田中君には相當虐待された筈の民間會社の人々の口からも聞いた、技術者仲間の口からも聞いた、更に代議士其他地方有力者の口からも聞いた、乃至は旗亭の女將や女中の口からも聞かされた。

氏は好く大勢の人の世話も焼き面倒も見てやつた、恐らく地方の道路主事又は土木主事の全部其他技術者迄も同君の聲の懸かつた者が全國の各地に居るであらう、是等田中君の知遇を受けた人々等は君の去つた事を恰も孤島に取殘された人々の如く言ひ知れぬ淋しさを感じた事であらう、民間會社の人々等は官吏生活より一轉民間事業會社に轉じた同君が民間會社の勤の悪い事を何れ痛感するであらう、誠に氣の毒であると云ふ自己體驗に基く同情心を起したかも知れぬ、技術者たちは田中君が在官中技術者の立場を好く了解し常に和衷協同氣持よく事務に従事し得た過去を追懐して同君の徳を忍び次に來る可き者の如何を憂慮した事かも知れぬ、代議士連中は今後自己の立場を有利に展開するの望み薄を嘆息したのかも知れぬ、料亭の女たちは同君の官界を去つた事が同時に同君の磊落の風姿に接する機會を失つたかの如き早合點からの認識不足の嘆聲を發したかも知れぬ、其動機は何であれ宛に角同君が官界を去つた事が斯くも各方面に偉大のセンセーションを惹起した事は何

云ふても同君が名物男であつた所以を裏書きするものであらう。

私は更に進て同君の内面的方面を解剖して見たいと思ふ、氏は實に情の人であつた、氏の其の部下を愛する事は人一倍であつた、しかもその愛たるや慈母の溺愛に非して嚴父の愛であつた、役所でぐすくして居る若者共を手厳しく酷使した同君は家庭にある時は別人の様であつた、夏の夕など若き人々たちと一緒に丸裸になつて庭を掃除したり金魚の水代をしたり立働いて、若い人々と夕餉の膳を共にして一杯飲みながら氣焔の内に若者たちに處世訓を語る君を見る事は屢々であつた、夫れ程に氏は一體人間味に富んだ男であつた、それは田中君が苦學の中に立身した自己體驗に基く情の發露であらう。

氏は好んで京阪地方に出張した、そして東北方面の出張は好まなかつた、今は故人となつた堀田土木局長が田中君「君は京阪地方には年何回も度々出掛くるが、なぜ東北方面に出張しないか、東北方面こそ君等が實地を見てやつて

大に土木事業を興し東北を援けてやらねばならぬのではな  
いか、君は好んで京阪地方に行くのは灘の酒を飲みに行く  
のだらう」とからかつた事があつた、確に堀田局長の看破し  
た通りかも知れぬ、併しそれ以上に田中君には大なる魅力  
があつたからだ、それは丹波の郷里に氏の老母が獨り淋し  
く暮して居た事だ、此の間の消息を聞いた前大阪市土木部  
長の島さんが「田中君は見掛に依らぬ親孝行者だね」と  
眼を濕して賞揚された事があつたが表面から見た田中君と  
しては島さんの言葉は至極同感に思はるゝ、此氏の持つ美  
點を彼の人情大臣と言はれた望月圭介さんが、氏が譴責さ  
れた當時に知つて居たらあのやうな處分を鈴木内相に要求  
しなかつたであらうとは今も同僚の多くが物語つてゐる。

同君の母は先年物故されたが今も尙生前同様孝養を怠ら  
ないで年數回慕參に歸省される、歸省の都度氏は干地にあ  
る親戚やら村内の故老を招き土地の婆藝者まで呼で一夕の  
宴を張ると言はれて居るが、衣錦歸省の御披露又は未來の  
代議士としての準備工作かは知らない、併し兎に角に故郷

の人を勞ふ事を忘れない、時としては興に乗じ婆藝者を引き具して京都邊迄遠征の脱線振りを見る事があるさうだが是が亦情の人田中君の面白き半面の面影であらう、近頃は歸省度毎に土地の政治家と會見して居ると噂されてゐるが夫れは將來に於ける政治的活動の準備かも知れないが、私が見るところでは氏が中央に居て郷里の爲に骨身を惜まないで奔走するから、其のお禮の爲に政治家が君を訪問するのであらうと信する、實際山陰道中で天下の難路と言はれた例の老ノ坂の改修や觀音峠の改良を政府が執行するやうに爲つたのは、道路其のものが悪かつた勢であることは勿論であるが、氏の力も與つて力となつてゐることは疑なからう、口善悪ない連中はまだ春秋に富む氏が内務省に居て自由勝手に行動することを許されてゐるにも不拘、其の地位を繁履の如くに捨て、民間會社に這つたことは、將來に於ける政治工作の準備が完成したからだと言つてゐるが、私共は夫れを信じたくもない、若し左様な志を持つて居るのならば斷念するやうに勸告したい。

田中君は熱の人である、あの繁激な道路課の事務を一人で引受けて處理した、従つて多少專政君主の非難はあつたけれども、君は遂に夫れを爲し遂げた然し同君の去つた後のことを憂慮する向もあつた位である、私は氏の爲めに將又氏の去つた後の道路課の爲に其專政的なやり方を改めて、道路なり軌道なり夫々の主任者を定めて分擔せしめ各々其の責任に依つて事務を處理するの可なることを注言した事もあつた、然し田中君は夫れを實行しなかつた事は今にして思へば殘念に思はれるが、是は田中君が餘りにも熱のあり過ぎた逆であらう。

今日我國の道路が著しく進歩發達したのは確に道路法制定の効果である、道路法は堀田土木局長近藤第一技術課長、佐上道路課長時代の特産物であるが實際起草の衝に當つた者は牧彦七技師と田中君とであつた、今日道路法の田中か田中の道路法かと言はれて居る位に田中君は十六年間道路法と終始したので、恐らく道路法乃至は道路政策に就ては我邦第一人者であると稱しても、決して過言ではあるま

い、氏は凡ゆる機會に於て道路法の所期してゐる効果が舉るやうに努めた、従つて悪く言へば道路法の前には他の凡ての法律は從屬的のものであるかの如く振舞つたその飛沫は遞信大臣の忌憚に觸れて譴責問題を惹き起し夕刊を賑した、道路費豫算分捕に叶田中君一流の智恵を絞つて能く其の目的を達した、而して氏は能く目新らしい事を目論見んだ、それは日夜研

究した結果の表はれであるが、彼の直轄國道工事の制を興したり最近では世間の注目を惹いた 關門

海峽架橋問題を提言して其調査に着手する機運を作つたりした、關門架橋の

問題が例の交通審議會で否決さるゝやうに傳へられたとき、之が對策に就て人知れず苦心したやうだが、之を解決しないで退官したことは心残りがするであらう。

軌道法の制定に當つては六法全書そのものと稱せられる今の鐵道次官の喜安さんや細野、石井の新銳法學士を向に

廻して能く論じ能く戰つて、今日の如く軌道監督を内務鐵道兩大臣の主管に改め以て道路行政の徹底を期した、自動車交通事業法の制定に當つては鐵道省の古屋事務官を憤慨せしめる位に自己の主張を狂げなかつた、實に強がり屋の大將である、其の反面には自然多少の無理もあつた、例へば

軌道法に伴ふ運轉信號保安規程が鐵道省令と

して發布されて内務省令は未だに發布されて居ない事である、従つて内務大臣は軌道の運轉信號保安に關する監督の依るべき準據を示して居ない有様であつて是等は主として田中

君が鐵道省との交渉に餘り頑張りすぎた結果

鐵道省が常例として内務省に合議すべき省令案を單獨に發布したのである、此様な失敗は土木法令の中に見出すことが出来るが氏の性格上派生した惜むべき缺點と言ひ得やう

缺點の序にもう一つ加へたいことは、酒を呑むことである、醉つて天下を取つたやうなことを言つてゐるが、其の



田中好氏

實懐中無一文であつて蓄積しない、いつも妻君が今のまゝ、で主人が死なば家族は乞食すると言つてゐるが、氏は一向構はない、喰はず飲まずで俵給を貯金しても天下の金持になる譯ではない、俺が死ぬる時代は家族が喰へなければ國家が扶養する時代になるに違ひないから心配する要はないと言つてゐる、そして金を構はずに新橋や赤坂邊を飲み歩く、其のお蔭で年末になつてもボーナスを持つて歸つたことが無い、是等は家庭を維持する上に於て困つた男である、夫ればかりでは無い著述の印税や原稿料は總て之を酒の爲に消費する、そして原稿を書く爲に眼を悪くして自個満足に耽つてゐることは人間田中として一大缺點と言ふべきであらう。

田中君は激務の傍道路改良會の幹事としてよく努力した實際に於て田中君が専任幹事の役目を果した、抑も道路改良會の創立の趣旨は我國道路の改良に關し道路熱の宣傳を目的として出來たものであつた、従て向ふ五ヶ年位の壽命のものとして計畫を樹てたものであつたが道路改良會が今

尙存續して居るのは結局「道路の改良」の機關雜誌の方と言はねばならぬ、一體道路と云ふ極く限られた範圍に於ける雜誌の記事として讀者をしてうまざらしめる爲に記述を撰擇する事は非常の難事である、従て兎角原稿難に陥つたものであつたが田中君は常に其の足らざるを補ふべく自ら筆を執つた、役所では寸暇なき多忙に加へ夜も亦忙しかつた田中君はどうして「道路の改良」に執筆する餘暇があつたかは全く不思議であつた。田中君は愈々原稿締切間際になると夕方寝て夜中の二時頃から起き出で原稿を書いたものだ、それが冬の寒いときでも夏の暑い時でもかまわずに、尤も時としては窮余の策として假病で欠勤して終日原稿を書いた時があつたが、實に田中君の精力には驚く位だ、田中君の體は處女のように柔かい、全日運動はしないで酒ばかり飲む、私は田中君によく注告した「君は若い間はそれで持つが年を取れば大木の倒れる如く弱る時が来るぞ今少し體育をも考えたらどうか」然し田中君は矢張體育には無頓着であつた——尤も最近は體を考ふるやうになつたが——そ

して相不變無理をする、斯様に「道路の改良」雜誌を我子の如く愛したものである。

田中君は義の男である、誰でも一と通りの義理は盡すものであるが、それは單に表面的のものと精神的のものとの差別はあるが、此頃の世相では人々は兎角前者に走り易い、表面的は所謂打算主義から來る、従つて一時的で所謂咽元すぐれば熱さを忘れる類のものである、精神的は犠牲主義から起る、従つて永久的である。世の常の人が多く前者に屬する所以は茲にある、田中君をして今日在らしめたのは君の京都時代の恩師丹羽氏と物故された村川虎雄氏とに負ふ所が尠くない。丹羽氏は田中君の實社會にスタートする時の指導者であつた村川氏は田中君を内務省と云ふ檜舞臺に登場せしめた介添役者であつた、従つて義に厚き田中君が此の兩氏に盡すことの甚だ厚いことは實に涙ぐましい位である、丹羽氏は四十有餘年間京都府に勤續されて居る人であるが、それは丹羽氏が精勵格勤常に正道を踏んで壯者を凌ぐ健康と元氣とを以て勉強される事に基因せる事は勿

論であるが、又田中君が陰陽に丹羽氏を援助し庇護して來た事を忘れてはならない。のみならず田中君は丹羽氏の上海する度毎に如何に多忙の時であつても一席夕飯を共にし故を温める事を忘れなかつた、併もそれが二十數年間續いて行はれて居ることは如何に田中君が義に厚いかを窺ふ事の出來る一例であらう。

村川氏は小橋土木局長を補任して河川行政に従事し河川行政に一新紀元を開いた隠れた人である事は丁度田中君が道路法に於けると同様である併も村川氏と田中君とは其性格趣好が酷似して居る、村川氏が内務省の河川課に主任屬として居た時分の威勢は大したもので地方廳又は民間の人たちは非常に村川氏を恐れて居た、村川氏がよしと言はなければ事が進捗しなかつた、それは實際村川氏に實力があつた爲め自然に村川氏が光つた譯であらうと思はれるが、それが爲め内務省は屬僚政治だと憤慨する一部の聲もあつた、君の場合に於ても之を非難する者もあつた、それは村川氏の場合と同様の原因かも知れぬが一面内務省の各課長

の交迭が餘りに頻繁であつて課長は腰掛式である事も亦大なる原因であらう、特に土木局各課の事務は専技術と密接不離の關係にある爲、事務に必要な程度の技術を了解するに非ざれば圓滑なる事務の處理は出来ない、それには永年同一課に止まつて居る必要がある一年や二年で決して覺えられるものではない、内務省が屬僚政治だとの非難の聲は

其の原因人の罪に非ずして寧ろ制度の罪と考えられる、從つて現在制度を改めざる限りは恐らく未來永却に此の非難は續く事であらう、聞けば佛國では技術に關係する課長は特に優遇して安じて永く其の職に止まらしめる由だが當然しかあるべきものであらう、閑話休題、田中君は村川氏を徳とし公事に私事に村川氏の爲に盡した事は是又涙ぐまじき程であつて村川氏の官界引退東電入社の場合、凡ゆる方法を講じて村川氏の勞を慰し村川氏大崎町々會議員選舉に

當りては寢食を忘れ東奔西走物質的精神的に援助して遂に其目的を達せしめ 神奈川縣囑託に轉向せんとするや當路の人を歴訪して之が達成に盡し村川氏病氣危篤より死に至

る迄の田中君の情義に至つては未亡人と共に村川氏も亦草葉の陰より田中君に感謝の意を示して居る事であらう、同時に村川氏は餘りに自分と能く似た田中君の過去を顧み田中君の將來につき「酒を節せよ」「健康に注意せよ」そして尙新生面に向つて活躍し天晴天下の大實業家と爲れかしと念願して居る様に思はれてならぬ。

同君の今回の轉向に一方ならず盡力奔走された前の土木局長唐澤俊樹さんが「田中君の實業界に於ける成否は人間田中を完成する試金石である、數年後に於て自己の造つた地下鐵道で自分が田中君と邂逅した時「金が御入用なれば何時でも」と言ふやうに田中君がなつたらネーと冗談を言はれた事があつたが、此の念願は單り唐澤前土木局長のみではあるまい。暴言多謝。

x

x

x

x